ニュージランドを旅して

—渡来動植物の逸出について—

大　賀　二　郎

1977年，ニュージランドの夏を旅した。自然にめぐまれた美しい国土とゆたかで平和な生活環境に心を打たれた。陽光を一ぱいに受けた住宅はショーガーデンと呼ぶ広い前庭をもち，多種多様の花が咲きみだれ，郊外には放牧地が果てしなく拡がっていた。多くの都市は広大な公園をもち，ところによっては都心でも清冽なせせらぎがあって，川鱒の姿が見られた。そして起伏の多い地形がその趣をそえ，庭園都市と呼ぶに十分であった。

北島，南島を縦断して，火山活動，氷河，湖水，木生羊歯の原生林などその美しさと変化に目をうばわれた。自然美の極致といっても過言ではないであろう。

しかし，長いバスの旅を続けながら，移り行く風景に見とれながら，ふと気になったことがあった。山岳や湖は太古の眠りそのままであるが，その演出者たる小動物やそれを色どる植物に不自然な感じがあった。帰化動植物が母屋をうばって大いばりで繁栄しているのに対し，在来種はひっそりと息づいている感じであった。森林にたたずむ鹿はかつて大陸各地から連れてこられた種の子孫であり，その森林自体も北米大陸から移植されたエントリ・パインと呼ぶ針葉樹であった。山野にはカラフルで大柄な山草が目についた。それは園芸植物が逸出したものであった。

マウントクック氷河群を前面に見上げる山麓のガラ場には園芸植物のルピナス，ジギタリスなどの大群落が野生の状態で咲きみだれ，それはそれなりにカラフルな景観をそえていた。白人の小女たちがこの花園のなかで，嬉々として遊んでいる姿はさながらこの世の楽園といったところである。しかし園芸種によるこのような多彩さは人によって異論があろう。

氷河の水を集めたワカディプ湖は針葉樹に囲まれて幽邃そのものであるが，元来マツ類を産しなかったため，この針葉樹はヨーロッパから移植されたものといわれている。湖畔にはチトセランが茂っていて，ちょっとアシのような趣をそえている。もちろん，園芸種が逸出したものであろう。

高原のヘイズ湖などは英本国から移植されたといわれるポプラのような樹形の樹木が湖岸全体を取り囲んでいた。本来は凄みのある湖であったのであろうが，濶葉樹林によって非常に明るい牧歌的な感じで，さながらイングランドの山野を見るようであった。

クインズタウンなどのリゾート地域は概して花に埋ったという感じで，山間の傾斜地まで園芸種が逸出して，かつ定着していた。マーガレット，フィソステギァ，ルピナス，キンギョソウ，アリッサム，ナデシコなどが野生化しており，ジギタリスなどは園芸種のぜい肉を落して，本来の原種に還りつつあった。

各地の乾燥した丘陵には，黄色のエニシダのような灌木がもうせんのように色どり，自然によくとけこんでいた。これもブルームと呼ぶマメ科植物で英本国から移入されたものといわれており，在来種をみるみるうちに駆逐しつつあった。

また郊外の住宅はオーストラリアと同じように，ショーガーデンと呼ぶ前庭がある。犯罪が殆んどないので，開放的で塀といったものがない。奥まで見とおしである。当地では庭は多分に公共的な性格をもっており，街全体を花で埋める大きな要素となっている。それぞれの庭は個性がよく出ており，丹精に手入をしている家人の姿が見られた。ショーガーデンからの山野への園芸植物の逸出も当然に考えられることである。

ニュージーランドは地質時代に大陸から隔絶したもので，その動物分布は概して貧弱で孤立的である。意外にも哺乳類は数種のコウモリを除いて全く存在しなかったといわれている。このことはまた貴重な動物を滅亡から救うことになった。かつて肉食獣や蛇類がいなかったため翼の退化したキウイやツアタラと呼ぶ原始爬虫類が今も洞内や岸壁でひっそりと生きながらえている。ワイトモ鐘乳洞では土螢が銀河のように妖しい光を放っている。しかしモアと呼ぶ史上最大の鳥は先住民族によって絶滅せられ，今や伝説上の鳥となった。

このように無抵抗の山野に白人移住後1世紀の間に，移入した種がものすごく繁殖しだした。鹿，アナウサギなどが在来種のように野生化し，スーベニアショップには鹿皮のネクタイなどが売られているくらいである。

ニュージランドはわが国と緯度，面積，地形，気象など幾多の相似点があり，いわばわが国を裏返しにしたような国である。しかし開発や公害などによって，生態系

の変りつつあるわが国と未だ過疎ともいえるニュージランドとこの面では対照的である。

環境破壊というドラスティックな形で変化しつつあるわが国に比べ，ニュージランドは渡来動植物の逸出という形で静かに潜行しているように思える。

これらのエトランゼたちにとって，新しいニュージランドの山野への適応は，わが国の場合よりも容易であろう。その理由としては，

(1) わが国よりも気候が概してさわやかで，温暖であること。

(2) 大陸から隔絶されていたため固有動植物相の種類が少なく，かつ量的にもその密度が低い。またそのような環境に育ったために侵略種に対する抵抗力が弱いこと。

(3) 森林帯がよく発達していないので，外来種進出の防壁になることが少ないこと。

(4) ニュージランドのこのような環境に対して，試練に耐えた北半球の動植物や淘汰によって適応能力をもつ飼育動物，園芸植物にとっては比較的定着が容易であること。

などがあげられる。

近年，国際交流の急ピッチな進展が生態系の大きな撹乱要素になっているが，ニュージランドではかつての狩猟動物や園芸植物が逸出し，そのものたちのまたとない新天地になっていると思える。

短い旅の見たまま，感じたままであるが，その断片をつづってみた。

『姫路市自然史研究会』充実される！

生物，地学，古生物など，自然科学の幅広い分野を対象とする，素人から専門家までの集まりです。

講演会，映画会，見学会を催し，機関誌を発行して，会員相互の研修を図っております。

事務所は

〒670 姫路市北条口132
中田内科医院内

におきます。連絡，お問い合わせは

〒670 姫路市北八代２丁目
県立姫路西高校内
家　永　善　文

までお願いします。

おわび　「新・兵庫の自然」について

昭和51年12月発行の「新・兵庫の自然」・のじぎく文庫のなかで，脇坂俊夫氏の永年の研究成果である「大屋博多と高野豆腐」（昭和49年八千代町役場発行）の内容を長谷川熙氏が無断転載したと著者の脇坂氏から指摘を受けました。「新・兵庫の自然」136ページ杉原紙と谷紙，同141ページの八千代町の凍豆腐の一部の文章が指摘されたとおりであることを長谷川氏も認めたので学会としても長谷川氏に対し厳重に抗議をし，今後の注意を促しました。

会員の皆様も今後出版物を執筆されるときは著作権について注意と研究をされるようお願いします。特に著者の了解を得ること，出典を明記することなどはもちろんです。

脇坂俊夫氏にご迷惑をおかけしたことを謹んでおわび申しあげます。

新・兵庫の自然　編集長　平畑政幸